

日本の吹奏楽におけるポピュラー音楽の導入

— Band Journal 誌の内容分析から —

Japanese Concert Bands and Popular Music As Their Repertoire
a content analysis of “Band Journal” magazine

Kyosuke OHKURA

大倉 恭輔

英語コミュニケーション学科准教授

抄録：

吹奏楽曲・クラシック音楽が主たるレパートリーとなる吹奏楽において、ポピュラー音楽系楽曲の導入の動向を明らかにすべく、吹奏楽専門誌の内容分析をおこなった。その結果、1970年代から90年代にかけてポピュラー音楽の採択率は増加したが、2000年代以降は減少しむしろクラシック音楽の採択率が増加していることがわかった。その理由のひとつとして、コンクール対策上、ポピュラー音楽の必要性が失われている点を指摘した。

Summary：

A content analysis of a Japanese magazine was performed for the purpose of proving the following 2 hypotheses. 1) After 1970's, pop music was added to the repertoire in wind music. 2) After that, repertoire of pop music kept on increasing. The results indicated that the former was proved, however the latter wasn't. Another finding was that classical music repertoire has increased remarkably after 2000's. As a conclusion, the reason for this increase may be the strategy to achieve good results in the contests of wind music.

Key Words : popular music, concert band, music education, leisure, repertoire, acculturation

はじめに

2016年秋、スウェーデン・アカデミーは、アメリカのフォークおよびロック音楽のアーティストであるボブ・ディラン Bob Dylan にノーベル文学賞を授与すると発表した。(Svenska Akademien 2016) いわゆる小説家・文学者ではなく、歌手への授賞は例がないことから世界的に大きな話題となった。日本でも多くのメディアが報じたが、その中である新聞の見出し・記事

に対し批判が寄せられたとされる。(J-CAST ニュース 2016)

すなわち「ロックを芸術に昇華」(日本経済新聞 2016)という見出しは、ロックを一段下のものとする価値観にもとづくものだという批判である。このような表現は日本だけではない。たとえば New York Times には「ロック時代の桂冠詩人であるディランが、今回の受賞によって、T.S.エリオットやサミュエル・ベケットらの仲間となるまで登りつめた」という一文を含む記事が掲載されている。(New York Times 2016) 当該記事の見出しは「文学の境界の再定義 Redefining Boundaries of Literature」というものであり、とくに何らかの価値観の反映ではない。だが、本文中の表現に「一段下」的なニュアンスを読みとることは可能である。

同時に、「high art と more commercial creative forms とのギャップが小さなもの」になっており、また「high and low art という古い分類が、長きにわたって崩れてきている」とアカデミー側が認識していることが、授賞の背景にあるだろうとも記している。そうした表現もまた、「high and low art」という区分が依然として機能していることを示すものである。

このような文化・芸術に関する区分法は、社会科学においては「高級文化 high culture - 民俗文化 folk culture」という対比として表現され、さらに、近・現代にいたっての「大衆社会 mass society」の成立とともに「大衆文化 mass culture」を加えた三層構造としてとらえることが多い。またそれを踏まえて、ポピュラー音楽研究においては、「芸術音楽 - 大衆 / ポピュラー音楽 - 民俗音楽」の「公理上の三角形」(Tagg 1990)を前提として論を進めることも多い。

もちろん、それらは歴史的・社会文化的背景から生じた様態にもとづく区分であり、ポピュラー音楽の研究者が、そこに何らかの価値概念を与えて研究をおこなうことはない。むしろ、「古い分類が崩れていく」中、音楽という営みがどのようにおこなわれているのかに注目することが多いといつてよい。では、「古い分類」はどれほど生き残っており、どれほど崩れているのだろうか。

実際には、「high and low art」としてのクラシック音楽とポピュラー音楽が、たとえば楽曲の構造や形式において融合つつあるとはいいいにくいものがある。また、音楽受容という点においても「古い分類」は生きている。今日、マスメディアからは多様な音楽が流れてきており、自らの好みにあわないものを遠ざけ無接触でいるような生活を送ることは困難である。それでも、その中から、人々は自分の好みの音楽を選択することが多い。

だが、古い分類にとらわれずにふたつの種類の音楽を受容する人々がいることも事実である。high art 中心の視聴をしながら low art の音楽を楽しむ層もあれば、その逆の形態もある。さらには、両者をまったく等価に受容・享受する層もいる。彼らがそのような聴取および受容・享受にいたった理由は、いくつか推測される。たとえば、家庭環境や友人関係、さらには書籍・雑誌などの情報源からの影響である。

加えて、マスメディアを中心とした非選択的な接触や対人環境などの要因とは別に、積極的に両者に接触させるような文化装置の存在も想定できよう。なぜなら、そのような存在がなければ、それぞれの音楽に接触しある程度の理解と受容をなすことは困難だからである。そうして、その文化装置のひとつとして吹奏楽をあげることができる。

本稿は吹奏楽に焦点をあて、ポピュラー音楽が受容されていくプロセスの基本データを収集し

つつ、現代社会における音楽行動に関する基本的理解を得るための手がかりを求めようとするものである。具体的な手順としては、吹奏楽専門誌におけるポピュラー音楽の出現率・時期を確認し、その様態および社会的背景との関連について若干の考察をおこなうこととする。また、ことに吹奏楽に着目するのは、それらが学校教育の中に組み込まれているだけでなく、卒業後に余暇活動としても参加する人口が多いためである。さらに、吹奏楽がそのレパートリーにクラシック音楽だけでなくポピュラー音楽を含むことがあるからである。

ちなみに、一般社団法人日本吹奏楽連盟に所属する団体は14241団体（2014年現在）であり、参加者は100万人ともいわれている。（日本吹奏楽連盟 2016 a） また、全日本合唱連盟に所属する団体は5105団体（2016年現在）であり、参加者は数万だという。（全日本合唱連盟 2016）さらに、日本生産性本部の調査によれば、余暇として合唱をおこなうと回答したものは260万人となっている。（日本生産性本部 2014）吹奏楽同様、学校教育の中に取り入れられるとともに、余暇行動としても一般的なものである合唱だが、参加団体数は1/3弱の規模である。なお、アマチュアのオーケストラは約1380団体であり（Freude 2016）、吹奏楽団体の活動実態のおよそ1/10の規模となっている。

これだけの数の体験者が、クラシック音楽とポピュラー音楽（という古い分類）に等しく関わる体験をしているとき、その意味について考えることは、広義の音楽研究だけでなく、教育や余暇という研究分野にも少なからぬ寄与が期待されるものである。

吹奏楽におけるポピュラー音楽の導入について：「Band Journal」誌付録楽譜の分析

1 「Band Journal」の概要と問題の所在

わが国における吹奏楽の歴史は、明治期の軍楽隊の設置に始まる。軍楽隊は、軍内部の活動だけでなく、一般市民に向けた演奏会をおこない、洋楽普及の一端をになった。また、軍楽隊経験者が除隊後、民間の楽団に所属することで、吹奏楽の間口は広まっていった。さらに、戸ノ下は明治後期/1890年代からはいわゆるスクールバンドが編成されるようになり、昭和に入る頃には学校関連の諸活動にも関わるようになっていくことを指摘している。（戸ノ下 2013:14-15）

戦後は物資不足の影響などもあり、一時的に吹奏楽もその活動の規模は縮小された。しかし、1950年代にはいわゆる朝鮮特需などを背景とする好景気により、吹奏楽はかつての勢いを取り戻していく。そうした中、1959年に、音楽之友社は吹奏楽専門誌である「Band Journal」を創刊する。（音楽之友社 2016 a）

戦前の時点で吹奏楽に関する雑誌は存在し、また戦後もいくつかの専門誌が創刊されている。だが、戦前から継続している雑誌はなく、2016年の時点で定期刊行されている吹奏楽雑誌はほとんどない。その中で、同誌は半世紀以上にわたって刊行を続け、現在でも発行部数は10万部を超えるという。よって、同誌の編集動向をみることは、日本の吹奏楽の状況を把握するための有用な情報源になり得るものといつてよい。

では、「Band Journal」とはどのような雑誌なのか。創刊号の目次をみると、「創刊のことば」について、器楽教育と吹奏楽との関係や地方のスクールバンドの現状に関する座談会が大きな柱

となっていることがわかる。(表1)

表1 Band Journal 誌創刊号 (1959年10月号) 目次

発刊のことば
創刊に寄せられたことば
特集 中学校器楽教育と吹奏楽
吹奏楽の位置づけと将来への道
指導者のあり方
中学校ではほん物(ママ)の楽器を
講座* 吹奏楽法 楽器論 I
合奏のポイント「アンサンブルの初歩から」
体験談 東芝府中工場吹奏楽団
座談会 地方スクールバンドの現状
指導者講習会に参加して
外国吹奏楽団の紹介 アメリカ陸軍軍楽隊
地方だより
吹奏楽・東西南北
吹奏楽連盟だより 編集後記

* 講座は、同年12月号まで3回連続の企画記事となっている。

とはいえ、そうした一種の教育的側面はそれほど前面に出ることはない。ほぼ一貫して、演奏者・指導者に有用な知識付与や技術向上のための記事が中心となっている。さらに注目すべきは、全日本吹奏楽コンクール(のちに「吹奏楽の甲子園」と呼ばれる)に関連した記事が大きな比重を占めていることである。

たとえば、2016年1月号から12月号までの誌面をみると、同コンクールに関連する特集が6回・マーチングバンド全国大会の特集記事が1回組まれている。すなわち、2ヶ月に1回はコンクールの報告(本選・予選)やコンクール出場にあたっての「傾向と対策」の記事が掲載されていることがわかる。そうした傾向は1970年代から現れているが、それは、ことにスクールバンドにとって「吹奏楽コンクール」の出場・入賞が大きな意味を有していることの反映と解してよいだろう。

同コンクールは、1940/昭和15年に「集団音楽大競演会」として開始された。だが、1942/昭和17年の大会を最後に、戦争の激化と終戦後の混乱のために休止となる。復活したのは14年後の、1956/昭和31年の第4回大会からである。この伝統を誇る大会に関する話題・情報は、多くの吹奏楽団員が待ち望むものといってよい。そして、そうしたニーズに対する、ほぼ唯一の吹奏楽専門誌といってよいBand Journal誌の対応が、上述のような記事掲載の間隔となっているわけである。

さて、同大会の第1回から今日にいたるまで、毎回、複数の課題曲が与えられている。だが、第1回から平成29年の2017年度大会までの課題曲を確認しても、邦楽・洋楽を問わずポピュラー

音楽の楽曲名をみることはできない。というより、同大会の課題曲はいわゆる吹奏楽曲にはほぼ限定されているのである。(全日本吹奏楽連盟 2016 b)

課題曲には、年度によって2曲程度のこともあったものの、基本的には毎年4曲が指定されている。すなわち、65回を数える大会において、約260曲の課題曲があったということである。その曲名をみていると、わずかながら「ポップス〇〇曲：××」という形式での曲名表記が存在することがわかる。(表2) たしかに、それらは典型的なクラシック音楽・吹奏楽曲とはやや違っている。だが、ジャズのビッグバンド的な要素はなく、むしろイージーリスニングに近いものといつてよい。

表2 全日本吹奏楽コンクール課題曲において「ポップス」が冠された曲名

昭和50年度 第23回大会

ポップス・オーヴァチュア「未来への展開」(中学校部門)

吹奏楽のための「シンフォニック・ポップスへの指標」(高・大・職場一般部門)

昭和51年度 第24回大会

ポップス描写曲「メインストリートで」(全部門共通)

昭和53年度 第26回大会

ポップス変奏曲「かぞえうた」(全部門共通)

平成元年度 第37回大会

ポップス・マーチ「すてきな日々」(全部門共通)

注:昭和52年第25回大会課題曲は「ディスコ・キッド」といい、ポピュラー音楽志向の強い楽曲といえる。
平成3年第39回大会課題曲は「ロックン・マーチ」といい、アフリカン・ロックが導入されている。

コンクールでは、課題曲とともに自由曲の演奏が義務づけられる。だが、自由曲においては、吹奏楽曲が選択される割合が低まるものの、代わりにクラシック音楽が選ばれることが多く、ここでもポピュラー音楽が演奏されることはない。たとえば、全部門を通しての自由曲選択率をみると、1位はレスピーギの「交響詩 ローマの祭り」、2位はラヴェルの「交響詩 ダフニスとクロエ」、3位がR. シュトラウスの「楽劇 サロメ」、以下、30位までのうち29曲がクラシック曲であり、残る1曲も吹奏楽曲である。(Musica Bella 2016)

コンクールの規程には、バンドの編成などについて細かい指示がなされているが、演奏すべきジャンルの指定があるわけではない。(全日本吹奏楽連盟 2016 c) だが、同連盟の定款をみると「吹奏楽及び管・打楽器による音楽の普及・向上を図り、もってわが国の芸術文化の発展に寄与」することが目的であると記されている。(全日本吹奏楽連盟 2016 d) 本稿冒頭でも指摘したとおり、「芸術音楽 - 大衆音楽・ポピュラー音楽」という一種の上下関係的な理解の強さに鑑みると、当該条項での「芸術文化」にポピュラー音楽が含まれることは想定しにくい。

都賀は、1961/昭和36全日本中学校吹奏楽研究協議会における、ひとつの実践発表を紹介している。その発表の中で、演目にポピュラー音楽を導入したくとも、多くの音楽科教師たちからの反対を受けるという実態報告がなされている。それについて、都賀は「ポピュラー音楽に大い

に魅力を感じながらも、それをストレートに出せない空気」があったのだろうと推測している。(都賀 b 2013:159)

ももとの連盟側の考えに加え、そうした「空気」は今日にいたるまで続いており、それが上述のような楽曲選択につながる側面があるのだろう。また、いちどそうした流れが形成されてしまい、かつコンクールで上位に入るバンドがそうしたレパートリーを有しているとき、それらの演目を無視してポピュラー音楽を選択・採用することは大きな困難がともなうものと解される。

いうまでもなく、ことに若い演奏者たちにとって、ポピュラー音楽をとりいれたいという気持ちは少なからずあるはずである。たとえば、表2の注で補足したとおり「ディスコ・キッド」という曲は1977/昭和47年度の課題曲であるが、若い演奏者たちの中には、それが課題曲であったことを知らないものも多い。動画投稿サイトのYou Tubeにアップロードされている同曲に対するコメントを読むと、課題曲には思えないが楽しそうな曲である・これが課題曲だとは信じられない・これが課題曲だったときの世代がうらやましい・なぜこのような曲が今は課題曲にないのかといった反応を確認できる。(ディスコ・キッド 2016)

一般的な生活をしている以上、ポピュラー音楽に接触せずに一日を終えることは困難である。そうして、その中に魅力的な楽曲が数多くあることも事実である。吹奏楽という形式を愛好することと、ポピュラー音楽の楽曲を愛好することは矛盾するものではない。よって、吹奏楽にポピュラー音楽を導入したい・自分の所属する部やサークルでポピュラー音楽の楽曲を演奏したいというニーズは少なからず存在するはずである。

ことにスクールバンドの場合、部の定期演奏会以外にも地域の催事への出演などでの演奏機会は多い。コンクールでの演奏は無理でも、そうした場で演奏する楽曲にポピュラー音楽を導入することは十分可能であろう。また、それは演奏活動をおこなう上での励みにもなる。

しかしながら、ポピュラー音楽の導入には、いくつかクリアすべき点がある。そのひとつとしてあげられるのが楽譜の問題である。ポピュラー音楽に限らずクラシック音楽をレパートリーとする際にも、「吹奏楽用に編曲された楽譜」が必要となる。吹奏楽の歴史の中で、クラシック音楽の楽曲については多くの吹奏楽用の楽譜が存在する。だが、コンクール課題曲の対象とならず、スクールバンドへの導入に否定的な教員が存在するとき、ポピュラー音楽の楽曲の吹奏楽用の楽譜は、どこから入手できるのだろうか。

そのチャンネルのひとつがBand Journal誌である。同誌は、創刊号の段階から楽譜を付録としており、それは現在まで続いている。そうして、これらの付録に採択された楽曲は、吹奏楽界におけるニーズをすくいとった結果であるともいえよう。いいかえれば、日本の吹奏楽の世界で、ポピュラー音楽がどのように受容されていったのかを理解する手がかりのひとつとなるということである。

2 付録楽譜の内容分析

本項では、Band Journal誌の創刊号から最新号(2016年12月号)までの付録楽譜の内容について確認していく。本論は仮説探索的なものであるが、概ね、以下のような目的および仮説にも

とづいて作業をおこなう。

a 目的

わが国の吹奏楽におけるポピュラー音楽楽曲の受容のあり方をさぐる。

その際、吹奏楽専門誌である Band Journal 誌の付録における採択曲の動向から把握する。

b 方法

1959年10月号(創刊号)から2016年12月号まで、全604冊における付録楽譜の内容分析

c 仮説

ポピュラー音楽は、若者文化として機能する部分大きい。いいかえれば、若者文化の隆盛およびメディア機器の普及がポピュラー音楽の受容に強い関連がある。

欧米などと同様に、わが国においても、若者文化は1960年代から大きな力を持ち始める。とはいえ、音楽だけでなくファッションなどを含めた若者文化が広がりを見せるのは1970年代以降といつてよい。

たとえば、難波は若者論研究に関する論考において、まず、1970年代から「青年」という表現が減少し「若者・ヤング」という表記が増加しているという先行研究を紹介する。そうして、1960年代の「異議申し立て」に代表されるような、固有名詞としての「若者文化」が、70年代にはかっこのとれた「普通名詞としての若者文化」に転化したという。(難波 2004:143)

このような認識に依拠するならば、吹奏楽の世界においてポピュラー音楽の楽曲が積極的に導入されるのは1970年代以降となるだろう。

また、その傾向は、年度を追うごとに高まるだろう。

3 結果と考察

a 楽曲の分類と構成

創刊号から2016年12月号までの付録に採択された楽曲は792曲であった。(うち、1曲分は非楽譜)

1962年までは1号に数曲の楽譜がついている場合があったが、1963年以降は1号につき1曲採択が基本となっている。(メドレー曲は1曲としてカウントした) また、初期には一般的な楽曲ではなく、練習曲が掲載されることもあった。たとえば、1959年10月号(創刊号)には、2曲の楽譜とともに「音階練習」「和音練習」の2種の楽譜がついている。なお、練習曲は1961年9月号を最後に掲載はなくなっている。曲数は24曲であった。

それらを踏まえた上で、音階練習を含めた楽曲を、以下の6種に分類した。

- 1) 吹奏楽 a (既存曲)
- 2) 吹奏楽 b (日本人作家によるオリジナル)
- 3) クラシック
- 4) ポピュラー音楽
- 5) その他
- 6) 分類不能

これは、本稿の目的が吹奏楽におけるポピュラー音楽の導入の様態を知るためであり、付録楽譜全体の詳細な分析は意図していないためである。また、すでに述べてきたように、吹奏楽の世界では、吹奏楽曲とクラシック音楽の楽曲がレパトリーの2大潮流である。そうしたことから簡便な分類にとどめた。だが、それでも検討を要するケースがいくつか生じたことを申し添えておく。

たとえば、1968年10月号には「聖者の行進」が付録となっているが、その扱いは「アメリカ民謡」である。また、1969年12月号には富山県の民謡として「こきりこ」が採択されている。だが、前者はむしろディキシーランドジャズの名曲として知られており、民謡として認識している層は少数と思われる。後者はたしかに民謡であるが、1960年代半ばからの、いわゆるモダンフォーク・ムーブメントの中で好んで歌われたものでもある。このようなケースについては、適宜、それぞれの時代状況を勘案し、ポピュラー音楽にカテゴライズするか否かを判断した。

また、曲によっては作曲者が管弦楽曲として発表した後、自身の手で吹奏楽版を編曲・発表するケースなどがある。このようなふたつのバージョンがある場合、最初に発表されたジャンルで分類した。

その結果は表3のとおりである。なお、年代の区切りは「1990年代 = 1991年 - 2000年」とした。ただし、1960年代は、同誌創刊の1959年10月から1970年までとした。

表3 Band Journal 誌付録楽譜における音楽ジャンル

	59-70年	71-80年	81-90年	91-00年	01-10年	11-16年	合計
1) 吹奏楽 a	24	1	7	0	12	4	48
2) 吹奏楽 b	44	7	8	12	30	10	111
3) クラシック音楽	37	37	36	30	60	41	241
4) ポピュラー音楽	22	70	66	59	22	12	251
5) その他 (民謡など)	81	19	1	18	3	9	131
6) 分類不能	2	2	2	4	-	-	10
合計	210	136	120	123	127	76	792

集計に際しては、吹奏楽曲を外国のものと邦人作品とをわけてカウントした。ただし、今回の分析の主眼は、付録楽譜におけるポピュラー音楽の位置づけの確認である。そこで、ひとまずは、これらを合算して比較してみることにする。

表3からわかるとおり、ジャンルはほぼ4種類に集約される。また、その比率はポピュラー音楽系楽曲が251曲(31.7%)で最も多く、以下、クラシック系楽曲が241曲(30.4%)、吹奏楽曲(外国・日本)が159曲(20.1%)、その他と分類不能のものをあわせて141曲(17.8%)となっている。なお、「その他」の項目には、民謡や唱歌などに題を採った作品や新聞社主催による高校野球大会の一種のキャンペーン曲などをカテゴライズした。また、「分類不能」の項目には、吹奏楽曲ともポピュラー系楽曲とも判断できない作品をカテゴライズした。

この順位からは、吹奏楽の世界においてポピュラー音楽系楽曲が確固たる地位にあるように見える。だが、すでに述べてきたように、日本の吹奏楽の世界ではコンクール対策が大きな課題となっている。その結果として、課題曲としての吹奏楽曲と自由曲としてのクラシック系楽曲とい

う組みあわせが確立している。

よって、ポピュラー音楽の位置づけをはかろうとする場合、吹奏楽とクラシック音楽の両者を合算したものと較べる必要がある。すると、400曲（50.5%）となり、ポピュラー音楽系楽曲（31.7%）に18.8ポイントの差をつけていることがわかる。この差に対して、その多寡を論ずる基準を持たないが、日本の吹奏楽の世界に一定の受容がなされているとあってよいだろう。

次に、ポピュラー音楽系楽曲の採択動向をみてみると、1959年から1970年の約12年間で22曲が採択されている。この時代の同誌では、複数楽曲が付録楽譜に採択されていることも多い。そのことから考えると、22曲という曲数は必ずしも多いとはいえないだろう。ところが、1970年代に入ると状況は大きく変化し、70年代には70曲、80年代には66曲、90年代には59曲が採択されていることがわかる。

本研究では、若者文化の普及にともない、付録楽譜へのポピュラー音楽系楽曲の導入が増加すると予想しており、この数字はある程度それを裏づけるものといってよい。（注1）しかし、同時に、そうしたポピュラー音楽の受容傾向が継続するだろうという仮説は立証されなかった。たしかに、1970年度からポピュラー音楽の採択率は急増したが、80年度以降は微減となっている。さらに、2000年代に入ってから採択率を大きく減らし、その減少傾向は続いている。

そもそも、1990年代はわが国のCDセールスが最高潮に達した時代であり、ミリオンヒットを記録する作品が数多く出ていた時代である。その段階で微減とはいえ、採択数を減じていることには何らかの理由があると思われるが、現時点では適切な説明を見いだすことはできない。

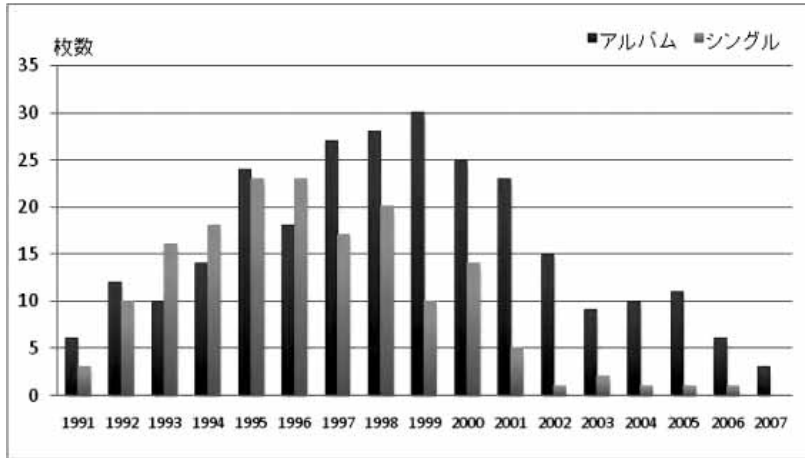
その上で、吹奏楽曲およびクラシック系楽曲との比較でみた場合、1970年までは吹奏楽・クラシック優位の時代であり、続く1970年代から90年代までは明確にポピュラー音楽系楽曲の時代であったことがわかる。それが、2000年代に入ると大きく様変わりする。2001年から2010年の間、吹奏楽・クラシック音楽系楽曲をあわせて102曲採択されているのに対し、ポピュラー音楽系楽曲は22曲となっている。つまり、この10年間における両者の比率は、80.3%対17.3%と60.3ポイントの差がついているのである。

この吹奏楽・クラシック音楽系楽曲の採択率増加の背景のひとつには、読者/演奏者側のコンクール出場にかかる意気込みの高まりがあると推測される。その意気込み=ニーズを、同誌編集部がすくいあげた結果、楽曲の採択ジャンルの移動がおこなわれたのだろう。ただし、その高まりが、何に由来するものかは不明であり、今後、詳細な調査が必要となろう。（注2）しかし、それだけでポピュラー音楽系楽曲へのニーズが影響を受け縮小したとは考えにくい。むしろ、ポピュラー音楽を中心とするCDセールスの急激な落ち込みとの関連には目を向けておきたい。

図1からわかるとおり、1990年代半ばから20タイトル以上のミリオンセラーが生まれており、1999年には30枚に達している。それが2000年から減少し始め、2003年には10枚を割り、その減少傾向には歯止めがなくなっている。いうまでもなく、CDを含む音楽商品の販売動向は、音楽の視聴動向と同一であるわけではない。だが、コンクール出場という目標を持った吹奏楽部員たちにとって、多様な音楽の聴取行動やポピュラー音楽系楽曲の演奏に注力する余裕が減じている可能性は指摘しうるだろう。同誌の付録楽譜に採択率されるジャンルの変化は、そうした側面

からも解することが可能と思われる。

図1 ミリオンセラーの推移 経済産業省 2009:4 (原グラフは日本レコード協会資料)



b ポピュラー音楽系楽曲の分類と構成

前項では、吹奏楽におけるポピュラー音楽系楽曲の導入に関する仮説に対し、検証・考察をおこなった。よって、本論の主目的は達したが、補足的にポピュラー音楽系楽曲の分類と付録楽譜への採択動向を確認しておく。

ひとくちにポピュラー音楽といっても、その間口は広く、また明確にジャンル分けをおこなうことも困難である。今回は、あらかじめ楽曲リストを閲覧の上、「吹奏楽におけるレパートリーとしてのポピュラー音楽」という視点から分類をおこなった。また、いたずらにジャンルを細かくしても、サンプル数の点で分析に適さなくなるため、かなり幅を持ったわけ方をおこなった。たとえば、日本の音楽でも、ロック的なリズム感が感じられるものはすべて「J-Pop」として分類した。その上で、特徴的な傾向を示しているジャンルについて指摘し若干の考察をおこなう。

クラシック音楽への親和性が高く、また教育の一環として機能する吹奏楽において、歌謡曲の採択率が第2位であることは興味深い。ただ、年度ごとの推移をみると、1970年代に多くなっているものの、その後は急速に採択率が低くなり2010年代にはまったく採用されていない。これは、70年代までが「歌謡曲が歌謡曲らしくあった時代」であることに関連するものと推測される。1979年から80年にかけて、山口百恵が引退し松田聖子がデビューしている。いいかえれば、よりポップス色が強くなった歌謡曲を採択する必要性が薄れたと、当時の編集部は判断したのだろう。

そのことと関連するように、1980年代から90年代にかけてJ-Popの採択率が上がっている。なお、ここではいわゆるJ-Pop以前に発表された楽曲も含めている。従来の歌謡曲とは異なるリズム感を持ちロック・ポップス的なテイストを有しているものは、こちらにカテゴライズした。また、海外のポップス曲も同時期に採択率が上がっていることがわかる。

ところが、この両者とも2000年代以降にはほとんど採択されなくなるが、その理由については不明である。

さて、吹奏楽という形態から、まず思い起こすのはジャズのビッグバンドであろう。しかし、今回のデータでは、ジャズ自体の採択数は14項目中第8位であった。しかも、古典的なディキシーランドジャズから採択されるなど、ビッグバンドとの関連をうかがうことはできなかった。吹奏楽は、奏法などの点からクラシック系の音楽であるといつてよい。しかし、形態上の類似点を活かした選曲がなされない理由については不明であり、さらなる調査が必要である。

ここまで表をみてきて、あらためて感じることは、歌謡曲やポップスやフォークといった、いかにもポピュラー音楽らしいジャンル全体が、2000年以降は採択されていないということである。こうした観点からすると、これまで述べてきた個別のジャンルそれぞれに採択されない理由があるのではなく、むしろ他の要因から解すべきではないかと推測される。

そこで目につくのが、日本のテレビ番組のテーマ曲である。本誌の最初期の段階から採択はされているが、徐々にその数を増やし、1990年代には31曲が採択されている。その後、採択数は減じるものの、全体を通した採択数は61曲ともっとも多くなっている。

さらに個々の曲目をみると、NHKの大河ドラマのテーマ曲が34曲採択されていることがわかる。大河ドラマのテーマ曲は概ね壮大な曲調であり、吹奏楽用に編曲しても聞き映えがするものが多い。その意味で、演奏してみたくなる楽曲でもあるのだろう。

とはいえ、NHKの連続テレビ小説やごく一般的なテレビドラマのテーマ曲も採択されている。その意味で、吹奏楽曲としての聞き映えだけでなく、ふだんから耳なじみのある曲にニーズが存在することも想定される。

前項で述べたとおり、2000年代以降はポピュラー音楽系楽曲の採択率自体が低下しており、それはコンクール対策としてのクラシック曲に対してニーズがシフトしていることの証左と思われる。このような状況がどれくらい続くのかを予想することはできないが、レパートリーの多様性をもって音楽の楽しみ方をより広く深くさせることの必要性を述べて、本項を閉じることとする。

表4 Band Journal 誌付録楽譜におけるポピュラー音楽系楽曲のジャンル

	59-70年	71-80年	81-90年	91-00年	01-10年	11-16年	合計
1) 歌謡曲	8	14	7	4	1	—	34
2) J-Pop	—	3	14	11	1	1	30
3) 英米ポップ	1	19	6	2	—	—	28
4) ジャズ	2	—	6	2	—	—	10
5) フォーク・民謡	2	6	2	2	—	—	12
6) オールディーズ	3	2	2	—	—	1	8
7) イージーリスニング	1	4	—	1	—	—	6
8) TV番組テーマ曲(日本)	1	4	8	31	10	7	61
9) 映画テーマ曲(日本)	—	1	3	—	1	1	6
10) アニメテーマ曲(日本)	—	4	8	2	5	1	20
11) TV番組テーマ曲(外国)	1	—	1	—	1	—	3
12) 映画テーマ曲(外国)	2	12	8	—	1	—	23
13) ノベルティ	1	1	—	3	—	—	5
14) その他	—	—	1	2	1	1	5
合計	22	70	66	60	21	12	251

今後の課題

本論考では、吹奏楽におけるポピュラー音楽の受容動向に焦点を置いて内容分析をおこなった。引き続き、特集記事などを含めた全体的な内容分析をおこないたい。

また、吹奏楽について愛好者の多い合唱についてもレパートリーの分析をおこない、それぞれの楽界における音楽観の相違をさぐりつつ、娯楽の音楽と教育的音楽の間に立って、演奏者たちがどのようなものを得ているのかを明らかにしていきたい。

注

- 1 そうした動向を受け、レコード会社のEMI ジャパンは、ポピュラー音楽楽曲のみからなる吹奏楽 CD を企画した。「ニュー・サウンズ・イン・プラス /New Sounds in Brass」と題されたそれは、1972/昭和47年から毎年発売され、2016年には第44集が制作されるほどの人気シリーズとなっている。(楽譜はヤマハ・ミュージック・メディアから発売)
表4での分類からわかるとおり、同誌の付録楽譜にはポップス系の楽曲は採択されているが、いわゆるロック系の楽曲はほとんど採択されていない。これに対し、「ニュー・サウンズ・イン・プラス」では、ビートルズが中心であるものの純然たるロック楽曲が収録されている。
そのことから、吹奏楽愛好者たちのすべてではないにせよ、よりポピュラー色の強いレパートリーに対するニーズ自体は消えていないものと解される。
- 2 2004年から2005年にかけて、日本テレビ系列で放送されている「1億人の大質問!? 笑ってコラえて」というバラエティ番組で、「日本列島吹奏楽の旅」というコーナーが設けられていた。これは各地の高校の吹奏楽部取材し、吹奏楽コンクールに挑戦する過程を取材したものであった。このコーナーは吹奏楽関係者だけでなく一般視聴者からも大きな反響があったとされる。
客観的なデータが存在するわけではないが、マスメディアの影響力の強さを考えるとき、当該コーナーがある程度の促進剤となった可能性がある。

references

Freude アマチュアオーケストラのサイト

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/jim/freude/>

(最終閲覧日：2016.10.23.)

ディスコ・キッド 2016

<https://www.youtube.com/watch?v=mRqQ3SWaX6Y>

(最終閲覧日：2016.10.23.)

J-CAST ニュース 「ロックを舐めている」 ボブ・ディラン日経記事が大物議 2016/10/14 20:03 配信

<http://www.j-cast.com/2016/10/14280761.html>

(最終閲覧日：2016.10.23.)

経済産業省 2009 『音楽産業のビジネスモデル研究会報告書』

http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/contents/downloadfiles/music_buisness.pdf

(最終閲覧日：2016.10.23.)

Musica Bella 全日本吹奏楽コンクールランキング 作品別ランキング

<http://www.musicabella.jp/concours/rank/flag:z/query:free/>

(最終閲覧日：2016.10.23.)

難波功士 2004 「『若者論』論」『関西学院大学社会学部紀要』97

日本経済新聞 2016.10.14. 朝刊

http://www.nikkei.com/article/DGKKASFG100A4_T11C16A0EA1000/

(最終閲覧日：2016.10.23.)

日本生産性本部 2014 レジャー白書 2014

New York Times 2016.10.13.

http://www.nytimes.com/2016/10/14/arts/music/bob-dylan-nobel-prize-literature.html?_r=0
(最終閲覧日：2016.10.23.)

Nobel Prize

http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/
(最終閲覧日：2016.10.23.)

音楽之友社 2016 沿革

<http://ongakunotomo.co.jp/company/index.html>
(最終閲覧日：2016.10.23.)

Svenska Akademien

<http://www.svenskaakademien.se/en/press/the-nobel-prize-in-literature-2016-0>
(最終閲覧日：2016.10.23.)

Tagg, Philip 1982 “Analysing popular music: theory, method and practice” in Popular Music. No.2. フィリップ・タグ
1990 「ポピュラー音楽の分析 理論と方法と実践」 三井徹編訳『ポピュラー音楽の研究』音楽之友社

戸ノ下達也 2013 「吹奏楽の近現代史」 戸ノ下達也編『日本の吹奏楽史』青弓社

都賀城太郎 2013 a 「スクールバンドと吹奏楽の普及」 戸ノ下達也編『日本の吹奏楽史』青弓社

都賀城太郎 2013 b 「戦後の吹奏楽とポピュラー音楽」 戸ノ下達也編『日本の吹奏楽史』青弓社

全日本合唱連盟

<http://www.jcanet.or.jp/index.html>
(最終閲覧日：2016.10.23.)

全日本吹奏楽連盟 2016 a 連盟概要

<http://www.ajba.or.jp/gaiyou.htm>
(最終閲覧日：2016.10.23.)

全日本吹奏楽連盟 2016 b 全日本吹奏楽コンクール課題曲一覧表

<http://www.ajba.or.jp/oita/kadaikyoku.html>
(最終閲覧日：2016.10.23.)

全日本吹奏楽連盟 2016 c 全日本吹奏楽コンクール実施規定・審査内規

<http://www.ajba.or.jp/kitei.competition.pdf>
(最終閲覧日：2016.10.23.)

全日本吹奏楽連盟 2016 d 定款

<http://www.ajba.or.jp/teikan.pdf>
(最終閲覧日：2016.10.23.)